

47
118
225
5



環海異聞卷之八



大槻文庫

野言語第二十二節

天文

天 ナニ子一ホー

ナニと事の上小舟の辞多し假令天を子一

ホーナニと事ナニ子一ホーと事地も「シム」なるを

ナニ「シム」嶋ハ「オスドロ」あるをナニ「オスドロ」と

漂客等始て着る島冬「アツカ」なるを

「アツカ」と称するの類々

日「シ」月「イセツ」星「ウイヅタ」



雲 [オ、ホロカ] 風 [ホコタ] 雨 [ド、トシ]

雪 [ス、イカ] 雷 [ゴロシ] 氷 [リ、ヨ]

天暗 [ホロシヨ] 天陰 [シ、ヨシ] 雨降 [ド、シ]

雨降 [ド、シ] 電 [ホ、ホ] 日出 [イ、サ]

日入 [ガ、カ] 北極 [セ、ウ] 寒 [ホ、ロ]

暖 [ケ、フ] 暑 [ジ、リ] 濡 [レ、タ] 焚 [ク、ヒ]

燥 [ソ、バ] 火 [オ、コ] 林火 [ク、ヒ]

火焚 [オ、コ] 煙 [ケ、ム] 天度 [ガ、ラ]

煙来 [ケ、ム] 赤道 [ウ、タ] 假令 [バ、セ]

假令 [バ、セ] 七十度 [セ、イ] 和蘭 [カ、ラ]

地理

地 [又、土] 又国 [シ、ム] 又国 [シ、ム] 又国 [シ、ム]

又国 [シ、ム] 又国 [シ、ム] 又国 [シ、ム]

又国 [シ、ム] 又国 [シ、ム] 又国 [シ、ム]

都會街 [ゴ、ロ]

凡そ都府在為 [ゴ、ロ]

つふたり [ゴ、ロ]

ブル内 [ゴ、ロ]

好之美之

山 [ゴ、ロ] 林 [ゴ、ロ] 砂 [ゴ、ロ]

石 カカシメン

圃 オコロデ

橋 モース

橋ハ土橋 石橋共にあり 何れも柱と不用

五十間程あるものも柱なしなる者

墓 ナゴラ

井 コロセウ

河 ライカア又
アイレカ

海 モーリヨ

潮 マナソリーリ

海水 モリーリツケ
ウチナイ

波 ボロシ

港 カワニガチニ
大光

嶋 オストロ

火災 ホヤツツア
スボヤリ

塵 ソローロ

外國 エノスタシノ

陥 シ 穴 テラ

戲 カメシ 場

東 ユイダマツ 川 イルコ ツ カ 江 にて 東風とゴントスと云

西 ザーザリノ 南 ユージョー

北 セイウエン

木 ゼリワ

火 オコニ

土 上ニ出ツ

金

水 ウチナイ
大光
ボクイ

銀 セレプロ

鐵

銅 メイツナ

硫 シイラ 黄 肥後白嶋

燧

監

白 石
産 瑪 瑙 瑤 屬

イ ツウエー ス カ

石 灰 辛 別ニ記す

モ イラ 石 酸 辛 別ニ記す

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 石, 橋, 水, 火, 土, 金, 銀, 鐵, 銅, 燧, 監, 白, 瑪, 瑤, 屬]

諸國地名本国通稱

ケ、タイツケ 又 邦タイスコイ

支那唐土

按小 魯西亜人支那を呼ひて 邦タイツケ又

邦タイスコイと云ふより 邦タイ六 國とも州郡

共云古又よや彼人諸國の名を何く スコイ

と稱するもの多し 和蘭所撰輿地略記譯

説曰支那は事を邦タイ又カタイ共言ふ

古よ云韃靼の内の一國なりと又一書よ支那

の地分つて二部とす北よあるもの成河北京

東トニカニシト 山西セニシト 陝西ホニシト 河南スニシト 四川セニシト

六部を統ふ南よ有物をヨニシトと稱す他

の諸部を統ふ

野鄙の人と云ふ支よ北人よ南

人を侮稱する語と云ふ若或ハニシト

蠻人ト云ふ事ハや

此邦タイ又カタイハ漢土諸書に見ゆる所の

契丹も邦タイの音譯字なるべし契丹

五代より宋の中迄本国の地及ひ

燕雲十六州の地を有つて國號を又大

遼とも云ふ此時山東陝西河南等の地を

は未タ領せん然まとも金元の二代継て

眞り 金ハ女直 遼の時より大よして上の

六部を有てり此時小あたる南朝を侮つて
蠻人も云くありむ右の如く全元の二代遼
は継ぐ以て北韃よてハ支那の夏を惣て
契丹と覺へ又轉してカタイ共云く成るト
魚島亞人韃地を移るべく併せるの日あり
ハ往来し其カタイの称呼を聞て支那
全州を統へてカタイスコイと泛稱する
夏となりしと思へる契丹の地實本國
東韃の内よりハ西は有へし因云
魯西亜の外の餘國西域天竺地方を始
して歐羅巴洲諸國よりハ凡て漢土の國

號をコイナ支那と緇那呼ぶハハま往昔秦
始皇の時其世の秦の字の音を傳へて
かく稱し來たりとコイスキュとハ人の撰
書中に見へたり我輩此稱を聞見せし
より必も秦晉などの世の名を聞て稱せる
名なると思ひし果して此正證を得る
又西域印度までもコイナと稱せる由て支
那緇那震旦等の音譯字あり因て顧ハ
ハ若くハ始免印度地方ハコイナの名を傳へ
是ハ西北方ハ及ハ後ハ彼諸國ハ
古來漢土國號ハ定免て稱し來り

事、や、是、猶、我、邦、彼、唐、の、代、を、志、け、
 往、来、あ、り、て、遣、唐、使、を、し、官、ま、す、も、
 有、り、程、盛、な、り、其、以、来、宋、元、明、
 今、の、清、朝、ま、て、も、と、海、を、し、唐、と、称、
 する、類、あ、る、を、

ガラシツケヌガランヤ
 スウエーツケ
 ハラシソースケ
 アンゲリ
 ホルトカリ
 子イメツ

阿蘭陀
 雪際亜
 拂郎察
 漢又利亞
 波爾杜瓦爾
 入爾瑪泥亞

イスハン
 トルカ
 ダルタ
 ペイケンツケ
 モンガリ
 トボリツカ
 カナスタ
 ダンツケ
 イーゴララシゼ
 ドーブラナデジタ

伊斯把你亞
 都兒格
 鞑而鞑
 北京
 蒙古
 新都
 第那瑪尔加
 新和蘭
 喜望峯

イロコツカより彼里数まで
 三千里北にあるの地

大光曰カラシタ

パトルアルカより彼里数
 十五百里あり

同ーブラナと「ホロシ」と同ー語にて好ましく云々「ドーブラ」を「穩」なり
 変之和蘭にて「カ」が「テ」に「ホ」に「ト」同義之詳ある変ハ「変」も「答」を

アンカリツケ

ウリホノウジンツケ

ヤツホン エツホン
ニツホン

インテイツケ

オロシイア

サーモリーヨ

ムスクワ

ペトルブルカ

カンデレイツケ

バイカル湖畔の地

バイカル湖の上午ニ在る地あり

日本

應帝垂

魯西亞

又バイカモリーヨ

莫斯科未垂

ヒートルベルグ

漂着の島の惣名

光太夫曰「アミシヤールツカ」の北より島嶼アリンデレイ

オスバンスカと云

千ヨリノイモモトリヨ 黒海

六日 秋久々の間潮水氷り詰る三四月より秋

三日 七月頃迄ハ軍船が繫き置くと聞ル

二日 俄に...

五日 ...

時令

年 ゴチ 今年 シヨオガア
ゴチ

一月 オゼン
メイセツ 一年 ゴチゼン

去年 ゴチ
ポロシテ 一時 オゼン
キヤアス

昼 ゼン 夜 ノチキ

來年 ホチドシテ
ゴチ

二年 ゴチ

半時 ホロウイナ
キヤアス

朝 ウートル

晩

ウイキル

日ノ半

ホロキイーテ

夜

の明りもスウマタ

今日

シヨウヲジニ

昨日

キヤラス

明日

ガフタラ

一昨日

テレキヨージニ

明後日

ボレテ

今

ノニキウ

春

ウイスノ

夏

ライタ

秋

オーセン

冬

ジマ

十二月名

正月

イスワリ

一ヶ月二十日廿三十日ありと覚む

二月

ヘテワリ

一ヶ月廿八日の月と廿九日ある時もある

三月

マルタ

四月

五月

マイ

六月

イヨリ

七月

イヨリ

八月

ヤキゴシ

九月

セキヤブレ

十月

オキノヤブレ

十一月

ノヤブレ

十二月

レカブレ

二月より以下ハ三十日三十一日と隔月有
 多クあり一年ハ五十三七日ありと
 是三百 如此故別小閏月あり若閏月
 七十日あり となり彼正
 とたつまハ七ヶ年免ふありとなり
 月ハ多くハ我方此十二月あり文化元年
 甲子十二月十四日長崎旅宿中
 スワリ 正月元日 となりき 漂流の年の曆ハ漂人
 等所持せしりも其後ハ二まかりまハ知ろ
 き様あり 初より推して曆日を定め三月月
 十五夜なりとてためし心算とて過越せり

子の年九月七日と覺て長崎の津入り

一と六日よてあり一十二年の内一日の差

なりしとそ 曆ハ彼国家を所持す横文字故固より年
別まゝの年号とすまじなり古来の
年数を以て稱を年号の心よ文化甲子
正月より乙丑冬迄彼曆數一千八百四年にま

梅小羅旬十二ヶ月の名 正月 ヤニコアレイ

二月 マルキウス 三月 マイクス 四月 エリウス

五月 セパチムベル 六月 ノエムベル七月 リアリス

八月 マツブリル 九月 イユニス 十月 アウグス

十一月 オクトベル 十二月 デイセムベル 此正名

轉し来りしものありし其毎月の名語

氣相似しもの有しつゝも 此と彼をハ

其月並大ひは差へし今姑くこまを

附し其中或る漂人等の覺違しつゝも

ありやと 他日の考小備ふ

人倫 官職諸名等ハ本條日載す

人 千ヨロヒイカ 男 ムセキムシカ 女 正ニシ十 センシ十

君 クシヤイナ 僕 オロホジエカ 父 バナシカ 大光 バヒシカ

母 一トシカ 大光 是 是をくくくぬかろくぬと云意なり

父親 オセソ 大光 母親 マナキ 祖父 ジヤジシカ

祖母 バブシ 兄 フラジツ 大光 弟 ブラー 大光

姉 セストラツサ 妹 セトラ^{大光} セスタラ

娘 ドーチ家の女成ふなり 他の娘をいふ時^{セメ}フカセ云

伯父 ジヤシヨシカ 伯母 チヨチトシカ 妻^{セエナ} 人の妻を

呼ぶ時^{チイ}ハクシヤイカと云^果の内義と云心

夫 ムウシ 姪^{チイ} 女姪^{メイ} オロニヤ 又仇^{チイ}親類とも云

孕婦 ベレホチタ 産婦 オロセル 老 スタラ チヨロウエーカ

少 モノトイ 子^{チイ}ヤカ 愚 ドラアカ 聰明 オシノエ

朋友 タワラシ 帝 イムベラトリ 后 イムベレレツサイ

王 ゴツタリ 是^是帝^帝はても王^王はても惣^惣て

諸 候^コロリ 奉行^{チイ} マチラウ 書役頭^{シキ}リタリ

通事 ベレチチキ 醫^{チイ} 兵士^{チイ} チノミカ

寡^{ホロ} ストイ 富^{バカ} トヨ

善人^{ホロ} シヨ、ホロウエイカ 悪人^{ホク} ヤ チヨロウエトカ

娼^{チウ} ホロタスノ、セエツカ 蝦夷人^{モク} ナトウ

又ホロクステ チヨロウエトカ 飛肺^{コレ} ヤコ

仕立屋^縫 通^通 ホロツノエ 燬治^{ユジ} ナイジ 午習師^{チイ} 近^{チイ} オチイ

午習子^{チイ} オチイニカ 仇^{チイ} 子^{チイ} オチイニカ 商人^{コベ} イツ

大工^ホ 通^通 ホロリニカ 石近^カ リメシキ 馬士^{コミ} ヒキ

商船^舟 モーリヨコフ 官船^舟 ストロミシ 師^{チイ} オチイテレ

町人^{メシ} ミシ 酒風^{チイ} 漢^{チイ} ビヤニサ 歩卒^{ヤウ} ダ

使節^{ホス} ラニシカ 大和尚^{マレ} ヘライ 美男^{カラ} シイワ

美女^カ 子^{チイ} イツサ 眼鼻^{チイ} 髪^{チイ} の 病人^ホ リノ

乞兒 ケレスタラン
モロモロ

盲目 スロボーイ

龍耳 ゴロホイ

跛 ホロモイ

庖人 ホーワク
ニヤキスル人

船師 カベタン

水主 マドロス

身體

頭 ユノウ

眼 カザマ

耳 オ、ホー

口 ゴーハ

鼻 ノース

髮 オーロス

胸 ドシヤ

腹 ヘレホ

手 オルカ
オコケ

足 ノイケ

皮 コトシヤ

骨 コーシテ

面 レツゼスイト

唇 グホバ

齒 ゾーベイ

尻 ソイバ
ゴッキ

乳 デーチカ

乳汁 モロコ

腰 シペナ

臍 ホーヅリ

陰莖 ホイ

絞 ペリカ
ト

陰囊 ムーゼイ

陰門 ビツタ

小戸 コニカ

經水 ルーポーシ

指 ビヨースト

膝 オク子

肉 マヤス

髮 ホルタ

臟腑 ケレケイ

肝 セイレツ

血 コロフ

發行 スポゼル

大便 サラジ

小便 シヤーシ

屁 ピヨリノイ

放屁 ベリトウ

滯澁 ソビヤーカー
ハナシル

毛 セイレツ

居所宮室

家 トー

坐敷 ゴーリンズ

閨房 コロツシ 臥床

庖厨 シモミア

戸 ジユウエル

窓戸 スタリン

窓障子 オユシカ

硝子 ステタロオコシカ

柱 ストバ

壁 スニナ

砌 ケツサリノカミン

階 リーニシサ

烟窓 トロバ

邏所 カラクリカ

垣 サプロート

獄屋 オストロカ

倉廩 アンバル

浴室 パニヤ

門 オロク

席 ポステイ

魚市 オレバノ

酒店 カバカ

民家 ケレシヤニ

寺 セレコフ 大光
ゼウリコ

尼寺 マノステラ

器財

旗 グラカ

祭貢 ボーシカ

火炮 オレヒキヤ

腰刀 シツパマカ

鉞 トツポカ

鋸 ロラー

前刀 カイシシヤ

刺刀 ビツワ

鞍 セツロー セツローを馬の
脊よりける人の

騎物 荷鞍の用 似たり人
セリツチカと云ふ 荷と付く 様馬 脊より掛る物

帆 バロス

櫓 シタ

舵 ロウリ

碇 ヤーコレ

漁 カナース

高船 ソーツナ

官船 チデシタ

軍艦 カラブレ

肺船 大中小有

碇 名志まき

并 網 積中 シロブカと云ふ 陸へ入る時用の

小をヤールレキと云て三艘あり惣て小遣ひに用ゆ

水車 カサネ 風扇 カサネ メイミンヤ 車 道中用ハハキピツカ 市中まで用ハハコニイト

雪車 サンギ 字 サンケイ 字 ビシ 紙 ヒシフカ 印 ビツセ 銀水晶等 小作

墨汁 チリニチ 圖 カリタ 笛 ドートチカ 吹て火をこす物をドートチカと云トハ吹ま之樂器の部載

書冊 キテカ 琴 ゴロシケ 胡弓 ケレゴ 大鼓 ハラバン 蒲團 オジアラ 三角帽 テレオコロツ シラツパ

絲 チーツケ 綿 ブカ 包祇 ボルトーカ 帽笠 シラツパ 杖 ハバ 杖 ハラカ

枕 ポーシカ 椅子 ストリヤ 輕賤の人所用長キ腰掛 スカミヤ 机案 食盤 箱 ヤルシキ スンドーカ 着物を合 箱櫃の類

去馬 ベキメン 鏡 ゼリカラ 眼鏡 オツチケ 時計 チヤスウ 錠 サモカ 錠 オコニワ 鉢 イコルカ

鍵 ケルーチ 吹筋 シビゼイ 木推 モトウカ 鉢 トリユニカ 羅針 カムバス 同宮林蔵曰エドロフクナシリ之美人ロシア名を 聞覚へてカンバスベキシヤラと云ふ

瓶 煮 ゴリセウカ 茶碗 チヤーシカ 鉢 トリユニカ 鏝 スーフ 大 チクワ 小 スケラニコ

午桶 ウシヤタ 硝子 ステラ名 樽 ポーシカ 鼻烟盒 タバターリ 烟管 ガンザ 燒物 のきせ 傘 名不覺 八本骨 小張

烟管 ガンザ 燒物 のきせ 傘 名不覺 八本骨 小張

燒物 のきせ 傘 名不覺 八本骨 小張

傘 名不覺 八本骨 小張

名不覺 八本骨 小張

名不覺 八本骨 小張

名不覺 八本骨 小張

名不覺 八本骨 小張

名不覺 八本骨 小張

名不覺 八本骨 小張

名不覺 八本骨 小張

名不覺 八本骨 小張

名不覺 八本骨 小張

蠟燭

シウゼイ

呂志まきり

コト作ら上品

牛脂

ハナレ

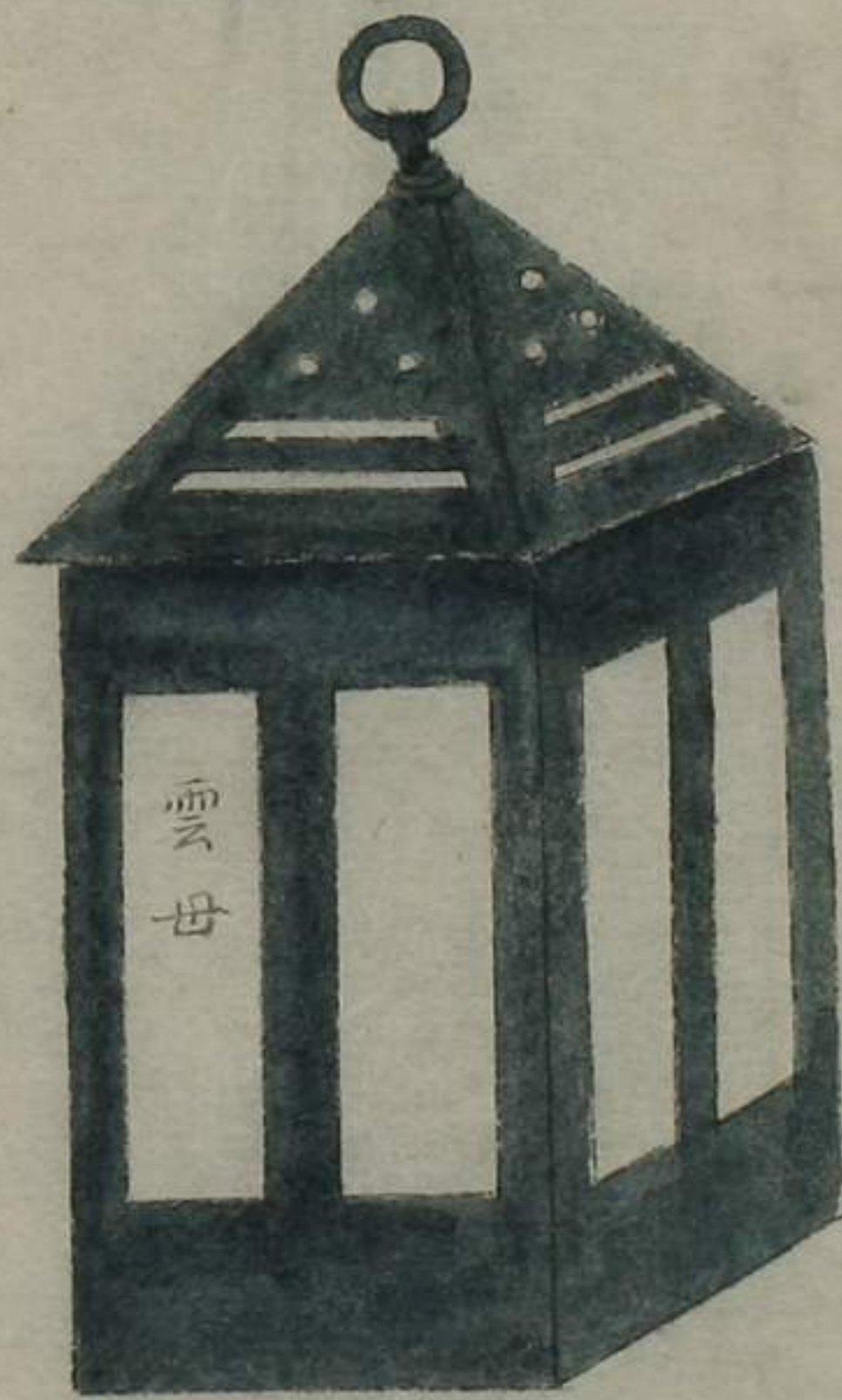
用ひ

燭臺

ポーシユウユシカ

提燈

ハナレ



ハナレ 板硝子を仕え免る物と雲母を仕え免る物との二種あり

帚 ワイニイカ

櫛 ゲレベン

牛皮

草袋 ソレ

変類を

コセリ

腰袋

カリシ

紙

ジミヨーカー

牙杖

名不覚鳥の羽 莖の先きの丸みの所を殺きたるものなりと
按よ和蘭小鴨をとり是又鴛鴦鳥の羽莖なるべし

網 子ヲト

瓦

泉壁を造築するハカリパイシ
屋根と音くは名不覚

井 子ロセ

土 子イシ

銀 鈔

ハセキナツサ
紙銭ハセキナツサ

コイシケ

我邦今用る將棊の如き物之盤も亦似たり

コントイケラ

十二苑双方馬子廿四有夾ミテ取る

物

骨牌 カルタ

三十六枚

コラライカ 三弦の類

メタリ

金或を銀にて圓形を作り両面横文字

并國號等あり 型を金鑄出たり

物と見ゆ是官より 免許にて賜る

よのにて其人襟まかけ胸の所を下る

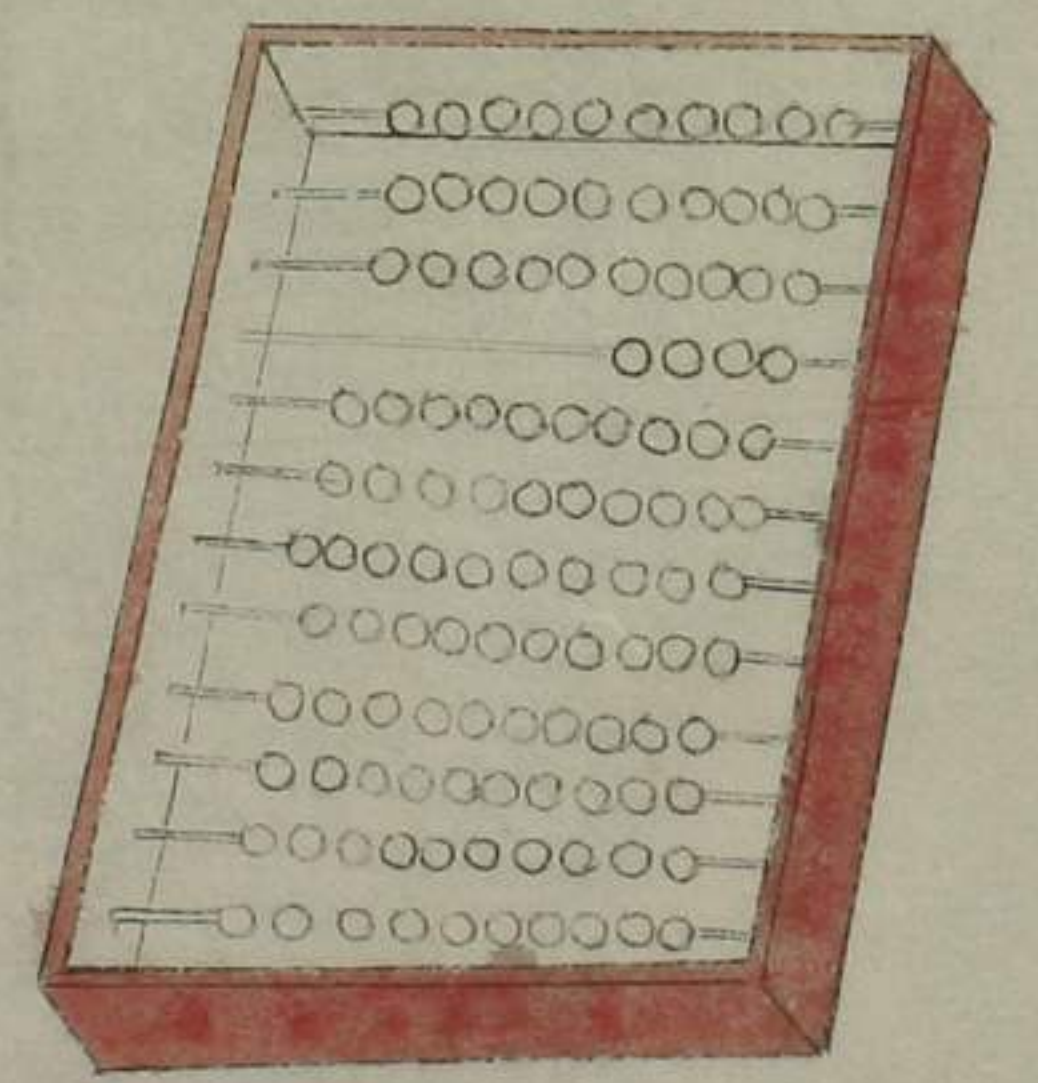
軍戦も出て首尾能歸陳たり

者凡そ何にても一切を立たる者の廢
 羨よして諸国往来自由すへき印證
 の如き物と聞ゆるなり此度使節船
 伴ひ来たる者共水主に至るまで此物を
 賜たり先年伊勢光太夫も歸朝の節
 王より賜り来たり彼日國中の人々
 是成見せハ恐甚敬ふといふ

按之和蘭書に諸国の此物の圖を載
 するものあり和蘭にハメニダアリーと
 云

十露盤

シツキヤウ



我邦の用は縦横の違ひあり縦に置き
 玉を横に丸へをちくく玉ハ十宛並四桁目
 四ツ玉ハ桁の數拾二あり

衣服織段飲食

衣服飲食の名各條に出すもの多くハ
らうに出すハ

衣服 プラーク

院巾 テレピヤ

袖 オロカワ

風領 ガスーカ

戒指 名忘

絹絲 セウコ

木綿 グハ

綿布 子メイカ

絹絲 子ツケ

絲 子イツケ

羅紗 ワクノウ

羊ハリスの毛糸
小織り

羅脊板 バーカ

羅紗小似イ毛織き物を
深人帶來の服此品あり

天我鳥絨

ウエレウエレト

緋羅紗

カラステ
ソクノウ

ハ絲

カタハ

糰 ソーロー

菓子ピラン

麥酒 ウイナ

上好酒 オ、ツカ

沙糖 サハリ

茶 チヤユ

蒸餅

ケレフト
ケレパ 麥類蒸餅より作られたる
物凡イケレゴト

女酒 エニシオ、ツカ

色赤
耳キ酒
下アノト、勸じ

プンシ

婚礼の部、
見り

焼酎 オ、ツカ

烟草 タバコ

コーヒイ 木實

飲食の部、
出

シベリ 貴蛇の類と漬る
赤酒あり

牛酪 モロユ

酢 オ、クツス

モロコト
取たる油 マスア

乾魚 ヨーカラ

鹽藏魚 ソーバ

油揚魚 ジヤリナ

煮魚 ソリイ、アバ

新魚 シウイシ

魚或麥粉に包ミ
蒸焼するものペレシケイ

粟 各不覚

イルコウツカあり
のなき、方のものなり

朝茶 サフタラガ

朝飯 オビヤアタ

晝舗 バウシナイ

暮食 オ、シーナイ

粥 カーシヤ

カーシヤ

麥蕎麥粟の
類にてはく

言辭

草

クヲワ

水

ゼリワ

花

スウエトシカ
大光ソウエトシカ

實

マシヨ

青

ゼリヨノ

黄

エモン

赤

アライ

白

ビアライ

黒

チヨリ
チヨリノイ

耳

スワツカ

酸

ケイスナ

辛

ゴリカ

苦

ゴリカ

鹹

ソリヨイノ

有

エイン

嚴く志はかりしと云事と
ケレゴソリヨイと云

無

子

丸

ライウ

右

ボラワ

始

サナウ

終

シヤバトシヤ

長

トウケ

短

コッコ

廣

シロコ

狭

オノスコ

前

ヘリヨト

後

ナガテイ

内

イツバ

外

ナトワリ

上

ウエリホ

下

テリスノ

遠

タリヨト

近

ベレツコ

深

コルボカ

浅

シヨトコ

剛

ツウエルト

柔

シヤトコ

見

スモテレル

聞

ツ子シウ

早

スコロ

遲

ドーケ

多

モノチコ

少

子モノチロ

強

ケレゴ

弱

子ケレゴ

童

子ヨミロウ

輕

子、子ヨミロウ

厚

トストイ

簿

トニシコ

難

ムテレイワ

易

子ムテレイウ

緊

トカ

緩

子トカ

銳

オストロ

鈍

子オストロ

臭 ドールハ

香 ドールハ

好き、薰イをいふ前文 悪きかをいふハ
トールハ子ホロシヨイと云

死 ポールメル

生 オレセル

真 プラウタ

偽 子プラウタ

虚偽 ウリヨールシ

圓 コロゴロ

方 子ヤテレ、オ、ゴ

三角 テレオ、ゴロ

好 ホロシヨ

惡 アシイ

美麗 ペレカラスナ

汚 シーロコ

滑澤 子イシテ

糙澁 子イシテ

泣 フラカ

笑 スシヨツサ

肥 トストイ

瘦 ソハヤ

大 ボリシヨ

小 マールニコ

高 ウエ

低 ニースコ

勝 ウエーゲラル

負 ホーイゲラル

知 ツナヨ

不知 子ツナヨ

正直 ビラマ

不直 子フラマ

寐 スツピウ

又寐入るるといふ変と
オスノウと云

寤 スタワル

怠 サ、ホール

不亡心 子ザボウイ

客 ゴシテ

客り来るるといふ変ハ
ゴシテペリシヨルと云

主人 コシヤイナ

諾 アズ

否 子ナダ

汝 テテバエ

向方 ドテ

我 シニマ

私 下輩、對

誰 クトウ

尊君 ウエ

婚姻 スツツハ

交合

将梅 エボウ

将消魂

サシローシヤ 己ニ消ス ガーアラル
エビヤル 請梅 ダイエツテ タイハ、貸セ

貸 ガイメイ

借 ガイメ

欲 ホーエー

不欲 子ホエー

行 シト、ハイ

待 ホコセイ

書 ビツシウ

讀 ゼタヨ

高直 ドールケ

下直 シヨウシウ

價と云ふはろと云ハ
オストビイと云

又 まけらまぬと云ハ
子オストビイと云

買 コビエウ 世買 ツタ。ポタリル 與 正。ポタリ

客齋 ヨクフカイ スコポイ 往来 ソデク 色々 マラツナシ

諸ヒラコイ 宗旨 ザツコン カ強キルモノコ

叱バテロウ 忌心 ニリウビ 恥カシイ ステツナ

驚 スボガル 踊 ビツサウ 又 オツビヤリチ

作 オレゼル オレゼルも生スル草カミの生すも

種 サゼル 種蒔 カラジイ 物を拵る麦をワシ大光目種痘

家作 ストロイル 私 キム 呼 ザウエサ

勤テレシキル 出セ キタイ 浴 コパイ

洗洗ウハモヨ 進物 コシテツザ 材木 レノス

薪 ドロウ 典當 ガツクラト 煮 ワリイ

焼 ジヤーレイ 味 フコス 美味 フコスホカシヨ 塩梅好と云

精進 ポーシキ 空腹 ゴルゼン 食時分 パラ

縫 セイ 沈 オツト子ル 教 オキウ

身 イスカヨ 惚 ルトヒー 罰 ゲライカ

痛 ホルノ 痒 スシツザ 熱病 ゴリヤチカ

痘瘡 オ、ヌ、ハ 痘痕をもいふ 花面の人々来ると云ハオ、ヌバベリシヨ

頭痛 キワホルノ 鼻衄 イスカロウ 青腿 ツンガ

強健 ケレブコ 下疳 ハラニツクス 缺唇 名不覚

唾 名不覚 癩病 名不覚 此病者一人見掛

病氣 子モゴイ 不快 子モウシ 忝 シバク 我より 鼻より

忝 テウニツク ナワドロイヤ 難有 脚坐ります 忝 ホツコシノシテボラゴタリヨ

物を贈りし礼を云

ボツコンノシテ

ボラガザストイ

私より目上なる婦人ニ對し

御礼を云

ナツドロイヤ

何人カコイ

外へせよ

大小便を云

他の内に入御見舞

ダラストイ

我より目上なる婦人ニ對し

久敷御目懸ラ思申替り

久敷御目懸ラ思申替り

同じ心を下賤の

テバイといふ事

ホナリ達者

カコワシチシ

あふくも御替

ソダリハ云

客来

ゴシテペリシヨル

維来とタトウペリシヨル

私て

何更て

チヨリスタイ

ヤスライ

チヨリスタイ

何内用

チヨウ

イズオリ

朝飯

オビヤタルニ

酒を

ウイナロイ

沢山

ソノコソ

茶をのんて

ウイナロイ

沢山

ソノコソ

煙草を

タバココレ

水を

ウチテ

パイ

何イも吐

チヨワニボ

吐

ボ

今日

シコチー

今日

寒

シコチー

今日

寒

あの人が オシゴレレル
云々

おまの
云々の
テーゴ

あの人多量居を
見よと云々

オシゴレレル スモテレル
見タ カメージイ
芝居

見まこと
云々

スモチレル ゴーレル

どつてあつゝ カユワレ ホロシヨリ
ようつゝ

なせえら ポシウセリゼツサ
ま

何てよく
ポシトウオロカヨ

たのせをた
第

ナシトウ テバイスシヨツサ

何とて
近ひ

鈍な人 子オミノイキヨロウエイカ

利口な
オシノイキヨウエイカ

大きく死んで
あつゝ

マナコポトメル

生きて
あつゝ 子ポトメル

案ト

ドーセヨ

案ト

子ドーマヨ

按ドイ
スよ ドーマイ

使ふて
やう

ホスラヨ

容次女
よ

カラサイサ

貴様的事
でハナム

子テパイオロカヨ

これを造
らん

アイタモシナレセイライテ

はくらむる

モシナレゼーライテ

造られぬ

子モシナレセイラ
イテ

火箸を
尋ねよ

シビセイ

イスカイ

同一事

ヒオロブノ

何きの
品 ヨトロー

馬鹿

オシマノワイ

うぢてハ
なん

子ヤニマノワイ

つぎもあふ ぽ千二
事

何程物
あり

ストットエ

此名ハ何と
アイタカキサヅワ

は何
よて中

アイタチヨワ

こまハ心

ドリロケ

何を
あつ

チヨワゼライ

何を見
らんあ

チヨワスモテレル

小曲を
あつ

ピーシ子

右言語一編ハ彼邦語萬分の一あるを
漂容等覚違へ聞違或は彼土音を
記す事と多くあるを又遺忘

せる事も多し趣なり彼人と雑話せるの間ハ
可なりふも用の辨する程ハ對話も出来し様
子なる共長崎以来彼ら字をとらるる
既一壹千辛及へる故是をより設けて
問糾も事共も忘失せり也とて 答へるる
事多し又固より 類愚の賤民聞見ハ
疎漏にして覚ゆべき言をも聞かざるハ
遺憾なりと思ふ事ハ此言語のこゝろハ
数々なり唯其言辞も覚へしとて
答へるる物を漫りし書集免他日始
九門を分て類聚せり是又各門

重複前後錯出次第紛れせるも餘多
かるべし是唯其邦語の一端を知るは定
まらざるべし一板に實の紀聞の日此言語
の二編の諸説話を聞終るの最末に至りて
實問しあるは彼等御殿の歸朝も
但り忽々の際在りきまに聞残せし
思ふ事も猶多し中より又聞誤り
書記とあやまりし支も有るを故に
~~~~正語をわきまにせし其毎  
語の傍に或は大光と記せるもの往年  
伊勢の舟子大黒屋光太夫彼地は漂到し

臆記せし聞書と書添しはより此男  
彼国の文字迄も覚へ来りし其言は  
多くは違ひもなかりしをきこむ

環海異聞卷之八終



環海異聞卷之九

イルコーツカ  
伊爾歌都哈  
ホツツク  
發軔  
ペトルフル  
伯多珠浦尔孤

道中記

此イルコーツカの地ニ滞留する車己ニハケ年の星表  
を経てつづの時帰朝をへしとふ日ありもな  
空しく年月成を福くしよをからん 癸亥 癸卯  
春の三月始と覺へて所年奇より日本漂流人共御用  
の車より御舟所へ相揃ひ出るを旨命り也此  
何事とも無へ福も拾三人お揃ふてありまへ事行  
中渡し其の丸由用の吉又は早帝都にあり

召せ旨王命の飛脚役人到来せしきまゝに仕舞  
右の人々使ひしうきと云く各畏りて己志く居所  
引登り夫々の用意調ひしう此度ヨライに新蔵も  
付添来度内紙有りたまはらうしく志出府して新蔵の  
も有幸の取郎なりとゴロニ止ませし由の如帝  
却りて此度日本漂流人となりて召登り換り来り  
事なまは紙おしりても少くも少くもあつた  
沙汰なり是よりして此の内紙も有りし趣まで町年寄  
内意せし此事日本人より我々為通新蔵附添  
此仰付下夜と為紙いり可然とせし様子にて新蔵  
子此旨のりのかへたり其趣紙に任まも承候し

各中合一統は此紙指出せし私を新蔵手と雖も  
てハ美智不都合も可有し此隣紙を以同人附添  
此仰付下夜と為紙いり可然とせし様子にて新蔵  
子此旨のりのかへたり其趣紙に任まも承候し  
車より何事も紙の趣尤の事此内紙も有し唯道中を  
と中車となりて新蔵も附添せし様子なる仍各年  
末親る世話文し人へも別まを告げ旅仕衣調其  
七日覚へて此地を發足す

役所より羅沙の服并股引水筒等十三人分  
且内意し此都府に任事も自由便利なま  
不用の物此地にて賣拂ひ要用の物をり小

して子怪くして可哀とあり。各其意より  
まうせり儀平は此時迄用せり方ありて家  
事の子侍も志ありし。水く骨朽として若干  
の銀子なり。餓したりしと也。

即飛脚の役某志人

名は何れか。オレキサシダラ何と云しと云る。又鷲の国號附るは袋を襟懸て

内は道中證文鑑れなれりもの  
あるは是を見て駭くは恐ま致すも

漂流人此人を市飛脚として就ておまを執

せ。泊ホローキとてし。官人のよし公用を念む

て急速に走せ下りし。まは飛脚とも心得し。

へ。候敷千里の獨行證文を帶せし。ハ

云あり。彼土俗常とす。而の豪邁の氣

象勇剛果敢とやいふへき。

外拾三人の者へ。コライ新藏附添都合拾五人首途  
も拾三人の者ハ

舵取 九大夫

水主 銀三郎

同 民之助

同 辰藏

同 清藏

同 八三郎

同 善六

同 茂次郎

同 津太夫  
 同 儀平  
 同 尤平  
 同 太十郎  
 炊 己之助

同所所をてたき川を渡其向ふ車馬引揃ひ有  
 一役人先車まで各駕り連き行より車三人  
 乗まで数七つ一乗は四人馬なり  
 按は二人乗りなまは七車まで八豆は  
 一車は三人乗り但し役人壹人のりまで  
 都合八車なり七車は漂客等語り

覺しきハ一車ハ三人乗りあり  
 尤驛々絶馬ありゴロジニテ町寄  
 此所をき送

車の上人の乗る所の圍ハ皮張ある物なり  
 前ハ入口あり其皮ハ直ハ前ハ垂下る様  
 雨天の節ハ是は内ハ  
 兩人向ひあつて居る扱車の前ハ腰掛あり  
 驛々より出る馬の口取一人是ハ腰をくけ鞭  
 の先きハ皮紐を施したる物を折くふり  
 廻く馬豆をすむ先き馬の役人乗り  
 鈴をつけてあり此鈴の音先き

の驛へ聞ゆ故公用の傳馬あり其驛にて  
馬を引け待受けて少くも遲滞なき人  
且右小も云皮袋の繪符も云へき物役人  
襟もかき居る也一宿を大ひは恐る趣なり  
取扱行違の更あまは権柄は答るん

彼国乗車の制衣漂客の説く如未聞  
さふ如くして新らるる圖を作りか  
頃日ある人として大光を尋問せしめ其答  
所より始て其形状の畧を曉まき驛路  
用る物と都府まで用るものと精粗の別  
のこもて大抵相同し道中用る物ハ用ヒツコ

と呼び都下まで用る物ハコレイトトと名く乗  
車ハ和漢共は兩輪なり其異なきは  
車前の方にも小輪一つ有て教正の馬  
牽す此三輪ハ管便の利あるに依り  
前の輪ハ形小之後ハ兩輪にして大ヤ我  
の大八車より稍大なり前なる小輪後輪  
の半分程あり此小輪は付きて上の方より  
出て有り其つく三つつけハ上へ向ふ  
是故其輪下々へ落着く所ハ後の大輪  
と同等なき人扱はくは六撞木形の腕  
不ありて是故前なる馬の胸の前へ絶す

其施す横木の左右に皮紐を附其両紐  
をひき返して車の臺板の左右の隅角を  
結ひ留む扱復々其横本の真中と左右と  
別な紐を付て其先きなる馬に施し又  
其紐を引き返して後の馬の右のひし所を  
結ひ置事始の如く先き馬何足までも其  
如くなるすは是或働する者車の臺の前  
ある腰掛に腰打ちけ其口下の前を銅  
の板をとりたる取有て是は其口をふみ  
け居るかくして其数足の馬の口を付する  
糸紐を一所に持ち取りて扱なる扱人の駕

所の圍は惣体皮張なり其圍の高は車上  
の臺板より屋頂迄立ちたる人のまゝ程なり  
窓の前より一ツ後より二ツの方より其は  
硝子板にてなり其屋上の前を垂ま下るべき  
皮あり風雨の節は是或下してたきかすこ  
人の入り口を左右より戸の外へ開く此戸を  
開けは内には掛ありて其開くを踏段  
となるべき銅板出川即是をのほりて内へ  
入るこ又圍の外後の方より出張ある木有  
従者は是より登り四本の細屋上より垂ま下る  
物と糸を持ちて立居るに騎馬の人其先

こゝろ其馬の胸の前は鈴を下く先く  
へ其郷音を知らずる為んたまは道中の節斗に  
地廻りと車の前の横の腕木より下るるに又左右  
入口の前は銅の板をつけ置き雨の時此を  
左右に翼の如く下り懸る是は車よりたれ  
よる泥土を防ぐ為なり

此話都府まで用る車の様子に駅路の車  
と是と同くくく兼略なるのくく聞ゆ  
又前の車輪を一つにして小く走らるる  
直行したる車右往り左往り横より  
人より時々くの所の旋轉よりして自

由をなす様は工夫したる物と見ゆ彼国  
の車もかくの如く前後大小三輪より其  
前の小輪の廻輪よりして右より横へ  
廻すとき自らくくむき内へ駕し  
人の重きも前へかゝる故後輪は獨り  
辛くすむまき人かを假るま少くして  
簡便の利あり想て西洋諸国の車は  
三輪と見ゆ唯其製作は国々より  
て少くくの差ひあり類なり

車馬之圖





同月八日 六十里程

彼里數ニ下同

悉い得い 馭場ニ

此所にて馬継代也其名不覚同下も驛名此所

羅維紗を織り出しの處の様見へやい

八日の日何とや如の驛う丸大夫清藏病

氣附中い是も車馬殊の外速急故車

は酔い様子へさまじより路次平坦タイラ又丸

右山を見ゆまも高山を見へ以樹木

松と櫻の木有迄形状物産の部は詳す

同九日頃 二百里裡悉い覚へ右丸大夫清藏

西人病躰不相勝旅行中々成氣い趣也役人

願為療養其祈は残置快氣次第追て指送

呉い様を頼置く

追々先きくの道中より外便を以及兼い

西人病氣不及快方イルユッカ送戻り

いよ

道中多くは昼夜車を走らせ食物の蒸餘も

車の上にて給へ使用の外も下り不中道を急やい

故路程の容子并に幾日と中事地名迄も委く

覚へも羨りも不仕い出立より千里程と中所にて

可テラスヤリツケと云所も着

此所鎮守を置い処にて附添の役人何々

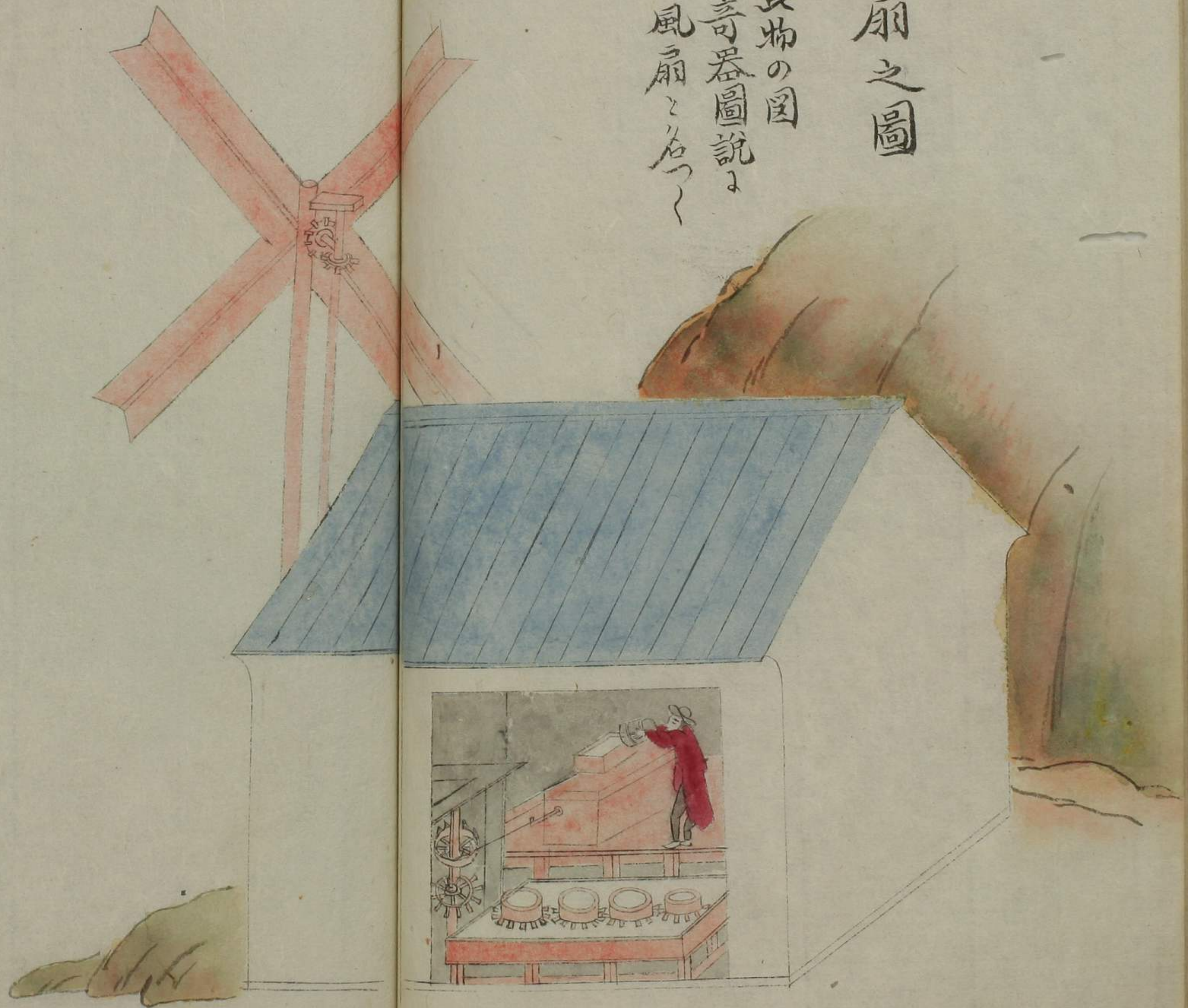
懸合の事も由座いと見ゆ暫く此所にて

ひまより中の人家も餘程に坐い但イルコ  
ツカシ程者無坐い驛々代官有るの地を  
郷學と病院とい必し建て置様子やう  
川あり名不覺牛内魚類の市店と  
多く見へい牛肉を此所よりイルコツカ  
遣すと聞へ中の此地の譯説  
別録  
出立の以來山々の外も雪ハ見へりし此邊  
に雪あり道中すして雪あり川々の岸も氷  
未だ消不中い道程次第に北へ向ひ  
泰の様覺い寒氣もイルコツカより別  
嚴敷に坐い

- 一 昼夜とも車を走らせ百二三十里
- 一 又者百四十里餘泰の事多し
- 一 此邊より粉杖挽せ中の風車所々高き如く  
仕掛に坐いを見受中の

風扇之圖

此物の図  
奇器圖説  
風扇と名づく



此邊より十日程ゆき、寒氣殊の外強くたへかき、  
程に見ゆ

一 場所志よりハ不覚の四月に入らぬ

存の路程一七日斗の間日暮し

思ふ内間もなり、東方あらくなり、日

出中の日輪も眼八分程は行ひ、

先年漂着の島を出船、

ヤロを乗落し、氷海に乗り、

夜のおき、海上に至り、此所と同様

と覚ひ

按、北邊止白里地方の夏月の氣

候よみて如此なり、其地志に見

たり、此方位の度数は、

あるまじと聞ゆ、再考あり

又此所より千九百六十里行き、


トンスに云所へ着、家造り是迄と替り、

なり

一 外ルタリ出の高客来り居る、

雑居の様子、此地の譯説別録

一 鞆而鞆人、眉黒く顔白く、

髻頭なり、帽子も頭形も、  
 如此物

一 を冠る、凡て力量ありと云

叔夫と云ふ「イルコウツカ」より二千里程ありと云ふ  
一五カテニボルカレと云ふ処へ着

一家造りをもトニス迄同様にて数を不足  
なり此所より山々を遠く見ゆ

一此所鐵を産する処にて鑄錢座あり  
炭城山の如く積置るを車のより見る  
けり夫よりして

ベリに云ふへ着此所よりベトルフルクより二千里  
二百里程ありと云ふ

一家皆右造りより町家も美を敷イル  
コーツ山等より八廣さ一倍も有て四方

赤開きたる地へ魚類甚く多し價も

尤賤しと云ふ「カシヤテ」杯も見ゆ藪の如き  
大奥地産

の部は此地の譯説別々録あり

一銀三郎一晩り大熱出て惣身毀敷小

瘡を發し面目まで潰甚く麻痺

の如き病躰へ是よりして呼吸但迫強

旅行雜叶此所へ留置り平愈次第

都下まで送り届け呉れ積り致し

身後銀三郎死生の程をうかす

皆々都府出立の節迄安否相分ら

もイルコーツ道立の節彼地麻疹  
流行せしむ必も銀三郎も麻疹ま  
有へきと答々や

此所より何里行きしや不覺

カザニ  
と中所に着

町家物て石造りよてべりは同様甚だ  
繁花の城下なり町の入口よ此方見附  
の如き樓門あり尤代官所なり

此地タルタリやの舊城の由城の前は大河  
有一里子ありし城の石垣至く  
高く築し見あげて見ら程なり其

上り堀圍有甚く堅固にして壯麗  
よ見り城内は寺も有とみるは皮草  
類此所名産よて魚目西亜領第一と聞ゆ  
尤價も賤しとて麥類雜穀も宜く  
土產價も心安しとて是迄圃は種蒔  
せし麥を見ら皆くちのびは此邊は  
有物を見ま日本の如く長く生茂す我  
邦と同じき生麥を此邊よて始めて見ら  
車の損破せしと此所よて繕せし故へ  
一夜逗留しきり但夜中の出入り町内  
の様子も明細は見ら免す

按はカガサニとハカサニなる一支那  
也加山之音譯せり譯說別小詳録を  
加山より千里程も有へしと聞ゆ

ムスクワ  
の大都府は四月半頃と覺へて到着  
す公役所は届け事ありしと聞へて一宿  
す

此地総國の都府なり国王の近親の高位  
の人城代は居る由町々數百町街道の廣  
さ車と共程並べて通用のなる程なり  
縦横共は皆鋪石なり家々皆下も尤  
敷石なり家造悉く石屋より華麗く

旅宿せし家杯も至て結構也間毎に有  
火床なり其造巧堅固より下より  
疊と塗りあけし所瀬戸焼物の如く  
表面は花鳥杯の彩飾をなせり是を準  
家内の様子諸道具も皆美を益せり  
食料ハ蒸餅牛 豚 雜内の類品大抵  
同一支あまも其調味格別の事く  
城市の間見物致し度と附添の役人へ  
願ふ此所寺院も亦十六百程あり  
此を見たるは二三年もかゝる一  
と云ふ新都ハトルブルグより大抵一倍も廣

かすへしとくけきもめり思

按、向トルブルクに我里数二里程もある  
べしと聞ゆまは此説より八四里四方もある

べきとや其詳なるを更も詳譯あり

一 町の入り口脇の方より高き所あり江戸の愛宕  
山杯の如く四面眺望ある所此所より兼て  
及々無類の大筒を居へ置り石垣を  
築よて掃きしとへは瓦屋四方明を  
たう下地も惣敷石此真中より三枚並べ  
てあり長サ三間程筒の縁り共より四尺五  
寸位あり 黄銅カチより 鍍カチして其室へ繋ぎ置

りり前後も自由より廻轉する様は仕懸たる  
物と見ゆ大玉も其左右より並へ置り其筒へ  
入るる程の所のなきは軽う大造の物へ  
按よ先大夫の記に銃口へ入り仰向より  
其午を延るに指先よりつらく中の長サ  
三間斗りを見へし但飾り物と奉存  
焔消を引きし穴無之と云

又按職方外記莫斯科未重條曰大銃  
長三丈七八一發用藥二石可容二人

入内掃除ニ

此所より十四五間も隔りの近邊より名高き巨



鐘有て土穴の内へ入る鐘の指渡し二三  
間詭顔元と可申所の大きハ三六程廻り  
へき其厚サハ下タへ落付居る故見べき  
様も無之其穴の内圍も下底より石垣  
よて墨の如く又其穴の上の惣廻りハ四九間  
四方の玉垣あり此大鐘何年以前何の爲  
に鑄らるるといふ事等ハ聞も留るに尤右大筒  
大鐘の所ハ六七人宛番人附居り  
按は先大夫の記ハ大筒と同所ハ大鐘御  
座の昔ハ釣置の焼落の由よて鐘ハ大地に  
喰ひ入り居り廻りをほり石垣を致し置

其内底へ下りて見の様よ致し其大  
ある事言説は述くべき事又よて重サ日本  
三の四貫五百目を壹貫目よ仕二千五百貫  
の目有之由小山の如くは相見得旨是ハ五十二ヶ国  
の名物と兼及い彼国壹貫目よ日本乃  
四貫五百目よて成坐の四貫目をは列し止と  
中ハ大鐘の詳説別録也

此大鐘有所の近所餘程小高き所三階作りの樓臺  
見へる

按は是ハ尼寺あり先大夫の紀聞よ其事  
見ゆ按はハスクワシと世よ所謂ハスコビヤハ

彼も自ら稱して「ムスクロ」又「ムスコウ」と云北極  
出地其北度半あるの地と云唐山より莫  
斯哥未亜スコビアと音譯せるハ即此ムスクロ  
都府の事よて都城本府の名をハ全洲の  
惣名よもあるん全躰惣州の名を「カロシ」  
と云なり近來我邦より「カロシ」と云是こ  
漢人ハ魯西亞 俄羅斯 鄂羅斯 等  
の音譯教名あり「ムスクロ」も彼曆教一十  
三百年我正安二年の頃より「ウチロシ」と  
云地より「ウチ」を都を遷せり此頃王国なり  
「ウチロシ」と云王の代より帝爵の國となま

と云八十餘年来今の「ペトルブルカ」と  
地ハ新都を建て王居と「ウチ」舊都を  
貴族を城代となし置よし先大夫の語よ  
女帝半年ハ新舊都府を交りて居住  
と聞よ今ハ新都への住居の様子なり  
簡便の要地ある故よや精詳の譯説あり  
別録も漂人等此都より宿暫取の間な  
まハ見聞せり如百分一と云へ

此都より新都迄七百里程の間都下の如く悉く  
鋪石よて其路をなすも土を以て築堅め平坦  
直道となす所々阜湿の所も大丸太を並へ其

土を置き、敷石をなす。平地の如くならず、故に数百里の路程結構云々ありや。

路次の左右に曠原ありて田圃ハナシ。遠く山を見ゆ。

迄なり。道中川々皆橋有。船渡の前ハナシ。尤宿継の

驛々も間近くあり。人家何れも大造なまとも木作り

のミナリ。此節雪ハあり。尤川々氷も見當らば

北の方へ向ひて行く。覺へ四月廿六七日頃、

ペトルブルカ」の都府に上着す。イルコッコ三月七日發足此都府へ上着迄

四十八日と覺ゆ。

梅は光大夫記にイルコッコを立て道法

五千八百二十三里と四十四日よしてペトルブルカ

に着す。道中車馬よて昼夜百里程宛

走に故誠は目眩なき、腸胃顛倒も

り如く堪へかり。同行刊リロウイ子と云

人の車は同車せり。此車を駕りたる如

甚く平穩よて少くも身體動揺も事

なかりき。此車の制衣度極て精巧三百

金を費せしと聞り。

ハスクリヨよりハ七百里なり。ナシ。幾日の成り

ハスクリヨは覺へば車をいせけハ一七日ハ至ると

き。

「イルユーツカ」出立より此所迄七千里の道  
中郡邑村落數十ヶ所あるへく一昼夜の  
早道なまき見聞は暇あらずしハ遺恨と  
云へし但臆記し来りて物語せるの地名  
右の二所なりこまら他の譯説よりて  
其地形土俗の大略を別録す

上着即 附添の役人高官某と云人の館に連行す  
則此所の表長屋といふ處き所の二階に置き旅亭  
となせり

是もセナトルと云貴官六人の其内まで三ツライ  
イトルイナリユミツツガラヒと云人の館のよし

セナトル此も政勢に強き人にて國老と云事  
は聞ゆ六人を一同に連行稱する取をセナ  
ツナと云御老中ともいふ如きなりガラヒと云  
吏を下ははら稱するハ六員の内二員  
ありてセナールツツの内までも格別なる事の  
よし「ユミツツ」をいへ「ガラヒ」稱せし由以下  
ガラヒとの記をも「ユミツツ」の古文なり  
梅は和蘭の候無射を「ガラヒ」といふガラ  
ヒにも此吏なる人きり  
追々其の得者此「ガラヒ」も惣て外国の吏取扱  
懸りをも兼らしむ故に此度の日本使節

事人並に漂流人イルコトツバより呼登せし  
夏等も皆此人の取えかゝるなり是よりして  
旅宿をも此館内は定め歸帆の節迄滞留  
中此人の取扱より種々厚意の世話を受  
けしり

館名を町家の並より惣廻り廣き二三町四方なり  
三重門なり第一大門なり第二重門南の脇に鑊炮  
を持ち多し番兵二人を置く第三重の門も石を  
ぎらぎらけ寺の唐門の如く入り口を丸くし二扉を  
板なりちよは薩力のあとき物を二肩より打越し懸け  
たる者番をたも此人即上へ出る者の取次をたもん

たし

同日晩道中召連赤い役人指添何きもカラロの前  
へ召出さる右三門を経て先づ堂上へ升るは段々  
階をのぼり三階の上へ到る毎階四面硝子障子に  
かゝの如く四方硝子放其所に入りし人影は  
しりしり移るなり追々玉宮へ出ると是より  
同一大小の違ある迄なり

其席上四壁は硝子の額硝子張の二面類鳥獸草  
木人物等の額数々かけなり有坐鋪も木残板  
敷より拵き仕切あまも都合よす我々邦の畳  
より二百畳以上敷程の廣きを見ゆ此白り居並

い知ちくちく<sup>と</sup>指圖ありし間席へ出る附添役人  
筆頭より引續くはカラフ正面に出つ其伯母なり  
ふ人も俱に其側に出つ陪從の者四五人其左右  
候もカラフ何きもへ會釋有て且問呈て各日本  
へ歸り度哉又此地へ留る居るきや何き共望次  
可致の銘々の心持次第取扱遊たさるが當<sup>カド</sup>帝の  
思召ことなり同行の内津大夫儀平元平太十郎  
茂次平己之助六人の者共何卒本国へ歸朝仕度  
旨哉相谷<sup>外</sup>別<sup>入</sup>の者<sup>積</sup>の<sup>更</sup>も<sup>カ</sup>カラフ再ひやさき<sup>一</sup>至極  
尤の事なり我帝王は外国の人を至て珍敷思召さ格  
別憐にも加へ玉ふ事なまは各何までも心支ふ及

とん安氣致しく居るへしと慾を申さきたり

此取<sup>コ</sup>コ<sup>イ</sup>新藏も泰と<sup>一</sup>な共此度同行  
来る事未言上不濟故列席せきり  
附添の役人其次弟をカラフ<sup>ハ</sup>出<sup>ル</sup>様子  
よて比旨々目通り濟て後は新藏別段呼出  
さき委細の更も尋らる趣く

- 一 カラフの服飾ハ上へ無地 色羅紗の羽織  
の如き物を着せり金銀のさくべりを附くとの  
なり其内よりたゞ表衣見留す 後目見せし  
帝王の衣服も  
同様
- 一 伯母君なりし<sup>ハ</sup>出<sup>ラ</sup>れ<sup>ル</sup>日本人見物の

たんと思ふは衣束追々目見へたる里店の  
正朋と同様に見えぬ

一 此度各伴ひ登り役人往来無滞日本漂  
流人召具し始末よろききて其切より金  
を賜り慶羨せりきと聞り

一 滞留中の賄是迄用ひたる結構なる調味  
なり毎日三ヶ度朝も一通の朝茶の子共  
の物なりと昼晩ハ料理一人前九通の  
程取り代へ出す食盤数肺とよみ其上  
は並へ列せ給仕人附々勝手ハ料理人在り  
て順々仕出す様子なり

一 蒸餅は添少く蒸美も塩水は牛肉雞肉の  
類は米を少く入き煮るとよみ其餘豚肉  
野羊菜は魚類種々あり

右蒸美五升は米壹椀程も入る様子  
なり漂着以後此所より始て米粒を食せり  
料理大抵右の如く一々ハ覺つた酒も一日  
二度食時の既出す皆麥醸酒はまじり  
風味至て宜し尤蒲萄酒も出さる

かうこの宅逗留中見聞の雑事

一 館内人数七百程有之 米地の人を召寄り  
置置と見ゆ表通りハ大抵男子斗り見ゆ

婦人々々々々々々

一糸地在所より 黠敷交を運送するを見たり

一虎斑トラハダ或ハ紫色白色印イロコイロ黄色の石をて厚子

罽カシ子コとく大サ一盪の盪程は製衣したる平

盤机の如きものあり脚は高く木をて作り坐

敷の中へ居へ置く此上より書ものよき時

用也石の名は云々云々

此石長大なる物寺院の柱よき物も毎度

見たり外の細工物よき見へて相管頭キヤルサラ

製衣し用たりも見受たり

一横文字の書籍も黠敷重く置くと見たり

一ガラクチ出行の節車馬に乗る六足馬は先キ馬

二足の鞍置なり先キ供の心なる一車の後アト

供二人附く近なり其餘外を為持モトり

なり

一館内家宅乃中よ草花を春食ふ所有真中

花壇よて種々の植物あり其廻りの圍硝子板

なり園下有て時々温暖冷湿の加減をなし

花を開くと實を結ムスむ様子なり此節

五月頃と見へて梅桃ウメすももの實を結ムスむ

たるを見たり此国小多りて数羊よりて始て

花實を見たり土地寒く國力クニチカラ如此家内よ



養えさ其花咲くといふ夏なきと聞ゆ  
一王上目見への節日本服着用もくきはし  
の所何きも着古く所持不仕由をいひまは  
引つスタコレシと云役所へやらまて此所まで  
拾人別銘々の行なけ寸法を取りあり其  
後又仕立出来きうとて諸取も行き、兩度  
此役所よりやらまたり嶋縹子着物兵羽織  
帶等なり

一皆々出行ひ時、毎度車馬は駕せきり四人  
乗よて輪其外も粉も飾り花垂なり  
作りたる車なり四足馬よて牽き力も車の共  
ハのぐ織を渡し草をとり車すゝめゆり  
もろ様なる是車轉動してもちり思様  
もろもの之四方ハ硝子板よて外の見へ  
透く様なり其内ハ茵シロを志し廻り  
美敷織物よて張る轆の上ハ腰掛有是ハ  
御者腰をかき鞭の如きものを持馬足マツカシを  
すも車の後ハ供二人立ち

一コラツの別荘へ見物も行き、夏あり珍敷  
事共多し見立なる鳥類なりある其中  
見馴る物ハ孔雀なるも畜ひ置り鉢  
植よせし奇草異木も数多あり此所

帝王の遊苑の面あり可ナスダと云湊も  
見ゆ<sup>カサミトヨ</sup>所なり

一 国王の軍艦千五百人乗りたりといふもの  
親く見<sup>シタシラ</sup>たり長サ六十四五尋程あり左右  
表の方にも石火夫の窓あり三階作りたり  
櫓も第一階の上なり舟底も鉄又石  
をほむ是船足を重くする為なりといふ  
其上も兵糧并に数十の水桶をたくもふ  
仕切り有て舵を取所と軍兵の居る所と  
あり彼国の船作り、舳<sup>ヒツ</sup>を割りたり如  
きものなり

此軍艦の事 弘強<sup>ク</sup>紀聞も所<sup>ニ</sup>雜夏  
篇<sup>ニ</sup>載<sup>ス</sup>るもの、茂質<sup>ク</sup>紀聞せむ此取  
他の新話<sup>ニ</sup>紛<sup>キ</sup>推<sup>テ</sup>窮<sup>ム</sup>、<sup>ハ</sup>皇<sup>ノ</sup>史<sup>ニ</sup>あり  
今是を見ま<sup>ハ</sup>一夏<sup>ノ</sup>両<sup>ノ</sup>様<sup>ノ</sup>の夏<sup>ヲ</sup>を録せ<sup>ル</sup>  
故<sup>ニ</sup>思<sup>フ</sup>る<sup>ニ</sup>雜事<sup>ノ</sup>篇<sup>ニ</sup>出<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>船<sup>ノ</sup>の圖<sup>ハ</sup>歸  
帆<sup>ノ</sup>の船中<sup>ニ</sup>て彼人<sup>曰</sup>備<sup>等</sup>既<sup>ニ</sup>見<sup>テ</sup>  
所<sup>ノ</sup>の新造船<sup>ノ</sup>の圖<sup>あり</sup>として画<sup>キ</sup>共<sup>一</sup>  
よ<sup>シ</sup>此<sup>二</sup>説<sup>七</sup>百人<sup>乗</sup>と千五百人<sup>乗</sup>  
等<sup>ノ</sup>の違<sup>ハ</sup>い云々<sup>あり</sup>、<sup>ハ</sup>再<sup>問</sup>の<sup>と</sup>あり<sup>て</sup>、<sup>ハ</sup>  
推<sup>シ</sup>決<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>、<sup>ハ</sup>姑<sup>ク</sup>兩<sup>説</sup>を<sup>擧</sup>げて  
他<sup>日</sup>の<sup>校</sup>正<sup>を</sup>待<sup>ん</sup>とす

此館中まて人々云々今より七日の  
此都より着きたる此國を開き給ひし太祖の  
百年忌にて大祭有りと傳ふなり

按て魚目西亞記譯説に伯多琉第一世の  
祖彼一千六百七十二年 歲覽文 誕生一  
千七百廿五年二月朔の事ハ則我享保  
十年よりして 醇辭辭 此癸亥迄は八十年  
たり欣然まは百年忌にてあるまじ彼  
一千七百零五年 歲覽永 たりハ癸亥迄  
一百年たり 漂人傳聞をる如き他の祭  
更先代の誕辰なるの祭事 ともあり

そや一躰年忌を祭ると云更らたなき  
趣にも聞ゆ

又其國誌に我享保十年 曆教一千七百  
にありて此都を新に造建せると聞ゆ  
夫より此年迄八十年に及へり或ハ偶数  
を得たるの説更にもありしや

卷之二十一

大正十一年... 天其國... 變事... 乃以...  
大正十一年... 天其國... 變事... 乃以...  
大正十一年... 天其國... 變事... 乃以...  
大正十一年... 天其國... 變事... 乃以...

